Virtual International Gender Studies（VINGS）の挑戦

大学教育におけるトランスカルチュラリティとジェンダー研究の試み

前　みち子

前みち子教授は、ドイツ、ザールラント州立大学で1985年に博士号を取得（最優秀博士号論文）。マールブルグ大学日本研究センター研究員を経て、1993年よりデュッセルドルフ大学日本研究科教授。1999年からは同大学東アジア研究所所長を務め、日独比較ジェンダー研究、ジェンダーと異文化間問題、トランスカルチャー研究とジェンダー、また日本の近代化過程における公共圏問題と文化アイデンティティのジェンダー分析などの分野において、日本語とドイツ語による多数の論考を発表している。最近の著書に*Frauenbewegungen weltweit. Aufbrüche, Kontinuitäten, Veränderungen*（『世界の女性運動――成立、継続性、変容』2000年）、*Diverses*（『多様なもの』2004年）などがある。

前教授は2004年５月から６月までお茶の水女子大学ジェンダー研究センター客員教授として赴任。本稿は５月21日に行われた公開講演会での報告をもとにご寄稿頂いた。

はじめに

日本同様ドイツの大学教育においても、近年さまざまな改革が実施されている。ボロニア協定[1]によって制度的には Bachelor（学士）、Master（修士）制度や Credit Point 制の導入を通してヨーロッパ内での大学制度の互換性がはかられるとともに、国際化と学際性に重点が置かれている。しかしながら専門化の進む今日、通常の授業のなかで、このような目標を達成することはなかなか容易ではない。2000年から2004年にかけて４大学（ハノーファー、ビーレフェルト、ボーフム、ハーゲン）の共同プロジェクトとして申請され、多数の他大学のジェンダー研究者をも交えてジェンダー研究のネット上の授業、Virtual International Gender Studies（VINGS）が実現された。VINGS は国際性、学際性ばかりでなく、欧州連合の目標であるジェンダー・メインストリーミング[2]を充たし、さらにインターネット上の授業という、メディア時代を先取りするものであり、その意味で大学教育における新しい挑戦とも言えるものである。ジェンダー教育を女性支援政策の一環として行うのではなく、逆にジェンダー教育を新しい技術と内容を組み合わせた先端教育として行うという意味では、2000年７月から10月までハノーファー市で行われた国際女性大学と同じ意図を持つものであり、国際性と学際性をジェンダー教育において実現する意味では、それをさらに発展させたものとみなすこともできる。VINGS は2003年のプロジェクト終了後、ドイツ連邦教育・学術省によってジェンダー・メインストリーミングにおけるベスト・プラクティス賞を授与された。

以下にこのプロジェクトの概要を紹介するとともに、とくにこれからの教育にぜひとも必要と思われるジェンダーと文化理解をテーマにしたコース「グローバル時代の異文化間コミュニケーションとジェンダー」を詳しく扱いたい。

このコースでは、近代化の枠のなかで国民統合プロセスとの密接な絡み合いによって規定されてきた

「文化」と「ジェンダー・コンセプト」を取り上げることによって、いわゆる「異文化間コミュニケーション能力」(異文化という概念はその用語自体、自文化と他文化という区別を前提としており、閉鎖的な文化コンセプトを基礎においている点で問題のある概念であると言える。) とジェンダー・センシビリティを高めることを目的にしている。グローバル化の動きが国民国家の枠組みを崩壊させつつある今日、この動きの中で文化とジェンダーのトランスカルチュラルな解釈が可能になりつつある。このコースは、文化研究とジェンダー研究にパラダイム・チェンジをもたらす新たな可能性をも探るものである。

1　ドイツの大学と大学改革

ドイツの大学は規模の大きい州立総合大学を主体とし、研究と教育の自由、研究と教育の相互関係などを理念とする研究・教育機関であり、そのレベルは基本的にすべて同等とされてきた。入学資格は日本の高等学校レベルに相当するギムナジウムで実施されるアビトゥアと呼ばれる卒業試験に合格することであり、大学への入学試験はなく[3]、教育の機会均等を目指すため授業料は課されてこなかった。国際化、またヨーロッパ統合の過程のなかで、これまでのそのようなドイツの大学教育のなかでの問題点、例えば大学中退者や長期在留学生の率が高いこと、卒業生の年令の高さや、大学教育の効率や研究機関としての質が問われ、改革が進められるようになった。

1－1　ドイツの大学

ドイツでは教育はそれぞれの州政府の管轄となっているため、大学は州立総合大学が基本であり、実践を中心とする各種の専門大学がそれを補う形になっている。近年私立大学も創立されつつあるが(2003年現在で95校)、州政府からの多大な資金援助が運営基盤になっており、完全に独立した私立大学はほとんどない。大学の総数は2003年では365校であるが、そのうち州立総合大学は100校、工学、商学など実践主体の専門大学は162校、芸術大学は52校、行政専門大学は29校、神学専門大学は16校で教育専門大学は６校となっている。大学への進学率は40％程度、学生全体の70％は州立総合大学就学者で、残りの30％がその他の大学で学んでいる。ドイツでは学生のレベルでは男女の割合はほぼ平等と言える。女性の割合は学生全体の約47％で新入生では2002年には50％を越えているが、上にあがるにつれて博士課程レベルでは約38％、教授資格試験合格者レベルで約22％、教授レベルでは約13％（そのうち正教授と呼ばれるトップレベルでは約９％）となっており、各種の女性支援政策にもかかわらずドイツの学術分野での女性の進出がいかに難しいかを示している。学術分野は依然男性中心の世界となっている。

1－2　ドイツの大学における改革の目標と方向

ドイツの大学は学問研究の自由、研究と教育の相互関連などを重視してきたが、それまでエリート的であった大学制度を1970年代からの学生数の増加に対応する制度として変革する決定的政策が取られてこなかった。しかしながらヨーロッパ統一、グローバル化する世界で大学教育が問題視され、ドイツでも近年さまざまな大学改革が進められはじめた。これまでの州政府（学術研究省）の権限を減らして大学の自治を強化し、それぞれの大学が特性を生かしながら、大学間の競争によってより質の高い研究と教育を実現することが大きな目標とされている。なかでも国際化は重要な目標とされ、これまでのMagister (日本の修士課程にあたるが、特に人文科学系の科目の最初の修了資格) や Diplom (とくに自

然科学系の最初の修了資格）に代わって3年制のBachelorと2年制のMaster制度が導入された[4]。例えばDiplomは堅実な内容とレベルの高さで定評のある修了資格ではあったが、Magisterともども大学での最初の修了試験であり卒業まで5年近くかかるため中退者などが多く、3年間で少なくとも最初の大学修了資格の取れるBachelor制度が推進されることになった。その他、これまで煩雑で構造のわかりにくかったMagister課程のカリキュラムに代わって、何時間かの授業をまとめてそれぞれ意味あるまとまり（モジュール）にすることによっていくつかの学科の構造をわかりやすくし、カリキュラムの組織化をはかるモジュール制や、European Credit Transfer System（ECTS）を導入して単位互換性によって学生の国際的な移動を可能にすることや、国際的ネットワークによる研究や教育課程（とくに外国の大学との共同博士課程創設など）の実現などが試みられている。新しい学科の導入に際しては、専門機関による評価が義務化され（さらに5年毎にくり返し審査が行われる）、定期的な自己評価・外部評価が義務づけられることによって教育の質が常に問われることになった。大学改革全体の大きな目標としては大学の恒常的近代化が挙げられている。これにはさまざまな内容が挙げられるが、連邦政府はその一環としてジュニア教授制度を導入した。ドイツの大学では教授として採用されるために教授資格試験に合格しておらねばならず、この試験の合格者の平均年令が（とくに人文科学で高く）40才以上であったため、家庭との両立をはかる女性にとって不利な制度となっている。そこで優秀な成績で博士課程を修了した者に教授資格試験なしで、6年間教授として採用されほぼ同等の権限が与えられるジュニア教授制度が設けられて若い研究者の自立がはかられている。同じように近代化の一環として大学の民主化とジェンダー平等のためにジェンダー・メインストリーミングに関するさまざまな政策が重要な役割を果たす。

2　VINGSとは？

2－1　VINGSの概要

このように大学改革のためのさまざまな方策が導入され、計画されるなかでジェンダー研究者たちの共同プロジェクトが企画され、実現されることになった。これは直接に大学改革を目的に開発されたプログラムではないが、さまざまな観点から改革のための重要な契機を含んでおり、ジェンダーの視点からなされた大学改革の実践とみなすことができる。

VINGSとはVirtual International Gender Studiesのことでドイツ連邦政府の教育におけるニューメディア導入プログラムの一環として、連邦教育・学術省のプロジェクト資金によってインターネット上のジェンダー教育が行われた。VINGSは4大学（ハノーファー、ビーレフェルト、ボーフム、ハーゲン）と多数の他大学のジェンダー研究者のネットワーク・プロジェクトとして成立し、2000年から2004年にかけて実施され、継続が予定されている。受講生はVINGS参加大学と参加研究者の属する大学の学生とハーゲン・ヴァーチュアル大学の登録学生で授業はネット上の授業を主体として、対面授業と組み合わせて行われた。VINGSはジェンダー研究を学ばせるとともにメディア利用能力を身につけさせるという二つの目的を達成するために計画され、実施された。カリキュラムはアクチュアルなテーマを扱い、学際性と国際性に重点を置いて企画された。

メディア教育においては自律に重きをおいて学ぶ姿勢と学ぶ過程そのものを重視すること、メディア教育の強みをそれぞれの内容と目的にあった形で使うことなどがとくに考慮された。ジェンダー教育に

新しいメディア技術を使った授業を導入することで、とくに女性たちに先端技術を身につけさせることと、ジェンダーを意識した形でのメディア技術の使用を心がけた。また授業内容を学際性と国際性を考えた形で提供することと、学際性と国際性をメディア技術の可能性をフルに利用した形で実現することなどがプロジェクト製作上とくに配慮された。

メディア技術のインフラストラクチャーはハーゲン・ヴァーチャル大学とビーレフェルト大学が受け持ち、技術の利用についての指導とサービスはビーレフェルト大学のチームが受け持った。

2－2　プロジェクトの背景

このプロジェクトを立ち上げるにあたっては、その背景にドイツ最大の州であるノルトライン・ウェストファーレン州の「女性学・ジェンダー研究ネットワーク」がある。これは1986年にノルトライン・ウェストファーレン州女性研究者グループの提案で、当時の学術大臣アンケ・ブルンによって設立されたジェンダー研究者のネットワークで、現在ノルトライン・ウェストファーレン州の大学のさまざまな分野に属する44人の教授たちからなっており、そこで働く若手研究者たちのネットワーク・グループもある。このネットワークの強みはさまざまな学際的研究・教育プロジェクトが立ち上げやすいことと、ここから若手研究者育成と支援が持続的な形で行えることである。またハノーファー大学は、ニーダーザクセン州の(とくに社会科学に重点をおいた)ジェンダー研究の拠点として重要な大学であり、VINGSプロジェクト立ち上げにあたっては州を越えたネットワークが実現した。

2－3　VINGS の大学改革との関連

では VINGS は大学改革の一環としてどのように位置づけることができるだろうか。VINGS はジェンダー研究をその枠組みとしていることから大学と大学教育の民主化とジェンダー平等化を促進し、それによって大学の近代化に寄与することができる。またその内容と形式において国際性と学際性が重視されていることから、この面でもテーマに重点を置く様々な学科の横断的な視点が可能になる。そしてジェンダー・メインストリーミングという課題を、今日ほとんどすべての職業分野において必要とされるメディア能力開発と組み合わせた形で学ぶことができる。VINGS はそのように、さまざまな目的を統合した形で行う革新的な教育形式と言える。また教育内容がモジュール化されている（いくつかの授業をまとめて意味ある一つのモジュール単位をなしている）ことから、モジュールの自由な選択と組み合わせによって受講者がそれぞれの目的に合わせて個人的にコース設計をすることができる。

3　VINGS 全体のプログラム

VINGS プロジェクトは基礎段階 1 と 2 を経て本段階に入り、さまざまな重点テーマを持つ学際的に組織されたモジュールが選択できる構成になっている。プロジェクト全体には社会学を主体に法学、政治学、経済学、文化学、地域研究など多岐にわたる専門領域の研究者25人が参加してカリキュラムが作成された。コース指導と補佐にはさらに多数の研究助手や学生助手が加わって、受講生の質問や、インターネット技術上の問題に迅速に対応できるような体制が取られた。コース全体はマスターコース（日本の修士課程に相当する）を想定して作成されており、16コース（くり返し提供された授業をふくめて22コース)、45時間(週単位)分の授業が提供された。実験的な授業であったため参加者の人数制限があっ

たが、全体でおよそ300人近くの受講生があった。コースによってはロバート・コンネル（Robert Connell）やジュディス・ローバー（Judith Lorber）など国際的な研究者とのチャットを含むものもあり、受講生にとって刺激的な形式・内容がもりこまれた。このように多数の学際的かつ国際的な研究者の大規模なネットワークによるカリキュラムは、普通の大学の授業では実現できないネット上の授業の大きな強みを発揮したものと言える。

VINGS 全体のカリキュラムは基礎の第一段階でネット環境になじませ、授業において必要なさまざまな技術を身につけさせることと、一般的な国際ジェンダー研究への入門が与えられた。基礎の第二段階においては VINGS の主要な４つのモジュールについての入門コースが提供された。そして本段階においては、この４つのモジュール内のさまざまなテーマがそれぞれ１コースとして、大学の一学期分の授業として行われた。以下に挙げたモジュールの内容を見てもわかるように、現代社会におけるアクチュアルなテーマが選ばれており、学際的に多角的な観点から考察されるように構成されている。学際性と国際性を生かした内容にするために、事前に何度もワークショップが持たれ、授業内容と教育方法ついて討議された。

４つのモジュールの内容は次のとおりである。

- モジュールＡ：グローバル化、ヨーロッパ化、地域化とジェンダー
- モジュールＢ：ジェンダーと労働の関係における社会的変容
- モジュールＣ：身体、性、健康
- モジュールＤ：ジェンダー関係と生活様式の変容

モジュールはいくつかのコースを意味のあるひとまとまりにしたものであり、それぞれのモジュールには次のようなコースが含まれていた。

- モジュールＡ：グローバル化、ヨーロッパ化、地域化とジェンダー
  1．グローバル化、ヨーロッパ化、地域化とジェンダー
  2．国際関係における戦争、対立、安全と平和
  3．法、契約とジェンダー：グローバルなダイナミズムと地域での交渉
  4．国際的なパースペクティブの中の女性運動の政治社会学
- モジュールＢ：ジェンダーと労働の関係における社会的変容
  1．女性たちの労働自伝
  2．労働と福祉国家 —— 労働、福祉と社会政策
  3．性別役割分業の社会史と未来
- モジュールＣ：身体、性、健康
  1．近代の身体
  2．無身体？　サイバー・ボディとサイバー・フェミニズム
- モジュールＤ：ジェンダー関係と生活形式の変容
  1．共同生活の法的問題
  2．生活形式と生活動態の近代化
  3．法、契約とジェンダー：グローバルなダイナミズムと地域での交渉

これら 4 つのモジュールのほかに領域横断モジュールとして2つのモジュールが提供された。それはモジュール「フェミニズム認識批判の戦略」と以下に紹介するモジュール「グローバル時代の異文化間コミュニケーション能力とジェンダー」である。

4　トランスカルチュラリティとジェンダー：グローバル時代の異文化間コミュニケーション能力とジェンダー

ここでは VINGS プロジェクトにおいて2003年から2004年にかけての冬学期に執筆者が担当して実施された領域横断モジュール「グローバル時代の異文化間コミュニケーション能力とジェンダー」を紹介したい。このコースのコンセプトは執筆者によるもので、コース指導と実施には執筆者の他に教育学専攻の研究助手スザンネ・クライツ-サンドベリ（Susanne Kreitz-Sandberg）と社会学研究者でアラブ地域専攻のスザンネ・クロナート-オトマン（Susanne Kroehnert-Othman）があたり、さらにモデル受講者として実施の前に実験的にコースを受講した学生助手のユリア・シュミッツ（Julia Schmitz）も受講生の指導補助に加わった。

4－1　コンセプト：文化とジェンダーの相互関連と脱構築

このコースは文化コンセプトとジェンダー・コンセプトの関連と相互関係をさまざまな文化圏とその歴史のなかで探るもので、時間軸と空間軸のなかでそれぞれのジェンダー・コンセプトの恣意性と構築性を明らかにし、それによってその脱構築を図るものである。さらにその分析過程のなかでそれぞれの文化圏の境界を越えるトランスカルチャーな次元が可視化される可能性をも探究する。

4－2　参加研究者

参加研究者は地域研究(アラブ文化圏、アメリカ、スペイン／南アメリカ、ロシア、南アジア、日本)を重点とした社会学、社会人類学、文化研究、文学、教育学の専門家であるジェンダー研究者 9 人(デュッセルドルフ、ボーフム、ボン、ギーセン、ビーレフェルト大学)で、ビーレフェルト大学の技術指導チームがそれに加わった。

受講者は多数の応募者の中から25人（うち 1 人は日本からの受講生；男子学生は 3 人）が選ばれた。基礎知識が必要なため、中間試験（学部課程修了にあたる）を終えて専門課程に入っているさまざまな専門分野の学生に限られた。綿密な指導を行うことが必要なためそれ以上の人数の参加は不適切と判断された。

ネット授業の始まる前にデュッセルドルフ大学で対面授業が行われた。午前中、全員の自己紹介があり、その後教官たちによる授業目的、内容と授業方式についての説明が行われた。午後はメディア使用上の技術的な説明があり、それを使ってのさまざまな実地練習がビーレフェルト大学のチームの指導で行われた。

4－3　プログラム

ドイツの大学での学期に合わせた16週間のプログラムで、入門、理論的基礎解説のあと、さまざまな文化圏について具体的な例にそって分析が行われた。

まず１週目に入門として一般的な解説を行ったあと、３週間にわたって理論的な基礎作りがなされた。その際、近代化過程における国民国家、文化、ジェンダーがどのように絡み合って相互に規定しあったか、またこの西洋近代化のコンセプトがどのように非西欧文化圏に影響を及ぼしたかが扱われた。このコースでは異文化間コミュニケーション能力を養うとともに、それをテーマとして扱うため、それが学際的な専門領域の絡まりあいの中でそれぞれどのように理解され理論化されているのかについて紹介された。そして文化学（Kulturwissenschaft）での新しいパラダイムであるトランスカルチュラリティが何を意味しており、このコースの中でどのような意味をもつのかについてはドイツの哲学研究者であるウォルフガング・ヴェルシュ（Wolfgang Welsch）のテキストを使って議論された。

第５週から第７週まではアラブ、USA、ラテンアメリカの３つの文化圏の中からそれぞれの受講者が一つの文化圏を選び、グループを作って共同研究作業を行った。それぞれのグループが選んだ文化圏についての課題をおえた後、お互いに他のグループを選んだ参加者のためにそれぞれの文化圏についてプレゼンテーションによる紹介が行われた。その後それぞれのプレゼンテーションの内容と形式についてチャット形式によって全体会で討議され、評価された。10週目にはこれまでの締めくくりとして３つの文化圏についての疑問点や問題点などの総括的な議論が行われた。11週から14週までは東欧、日本、アジアの３つの文化圏が、今度は順次扱われ、15週目に疑問点などが議論され、最後の16週目に全体の総括が行われた。

４－４　授業の進行方法

大学での授業にそって上記のように16週分の授業内容のテキストがあらかじめ準備されており、受講生たちは１週間ごとに新しいテーマに取り組んだ。テキストにはさまざまな概念や、人物・事項についてのリンクが付与されており、さらに情報が得られるようになっている。毎週テーマごとにいくつかの課題が準備されており、学生たちは次の週の始めまでに課題に答えてコメントや小論文を提出する。教師たちは翌週の始めまでにそれに対するコメントをネット上に掲載する。その間も疑問点について個々に教官と電子メールでコンタクトを取ることもできるなど、きめ細かい指導方法が取られた。

４－５　ネット環境

授業の進行に際しては、ネット環境上のさまざまな可能性をその機能に応じて利用することができる。例えばいろいろな概念や人物･事項について「ウェブサイト」を使う。また疑問点やコメントを「フォーラム」に掲載し、他の受講生と意見（テキスト形式）を交わすことができる。また特定の時間を規定して参加者があるテーマについて「チャット」を利用してリアルタイムで同時に議論することができる。「BSCW（Basic Support for Cooperative Work）―サーバー」は、参考資料となるさまざまなテキストを保存し、利用するのに便利である。その他「電子メール」や、さまざまな「リンク」などを効果的に利用してそれらの主要機能を補う。

４－６　コースの目的とコンセプト

このコースの目的は単にさまざまな文化圏についての知識と理解を深めるだけでなく、文化とジェンダー・コンセプトの関連を理解し、自分の考え方の基礎にする。また、新しいメディアを使いこなすだけでなく、自分の立場、見方、考え方、文化的偏見について常に自省的であり、相手の立場、見方、考

え方、文化的背景についての理解能力を身につけ、コミュニケーション能力を開発する。さらに、メディア上の情報について判断し批判的な距離を保ちながら利用できる能力を身につけるように訓練する。

5　トランスカルチュラリティとジェンダー研究

5－1　国民国家・文化・ジェンダーの相互関連

近代化を押し進めるなかで国家形成と国民統合は中心的な役割を果たしてきた。この国民統合の過程のなかで国民国家、文化とジェンダーは相互に規定しあいながら形成された。国民国家形成はさまざまな意味をもち、多様な局面を含んでいるが、何よりもまずそれぞれ異なった歴史的条件のもとで社会的文化的に構築された集団アイデンティティの一形式と見なされている。それは今日ではもはや不可避の現実としてではなく、政治プロセスと社会的文化的変容の結果であり、国民国家アイデンティティは政治と文化の間の緊張関係における集団性の構築として理解されている。国民国家とジェンダーは両方とも、機能分化の進んだ近代社会へと移行する危機的な状況の中で、差異を形成することによって社会・文化的秩序を維持するために重要なアイデンティティを与えるものとして構築され、その際差異を説明するために「文化」という概念が利用されたと言える。国民化の過程は国民の統合の過程であるとともに、誰が国民であり、誰が国民でないか、つまり統合と排除のプロセスでもある。外部に対しては「文化」の違いによって境界線が引かれ、国民国家内部では「ジェンダー」の差によって男性の優越が保証されることになった。

文化は本来、それ自体ハイブリッドで、他のさまざまな文化と影響しあって常に変容しつつある。ところが国民国家の境界内部ではしばしば文化は純粋で単一的で、ある民族あるいは国民に固有で独自のものであると考えられている。さらにある文化はその内部でのジェンダー規範を規定し、保守的な立場を維持するために利用されている。同様にジェンダー秩序も外と内に対し、文化・社会体制を維持するための防波堤として利用されている。女性たちは内に対しては男性の優位性を維持するための境界線、外に対しては自己文化を他文化と区別するための自己文化の守護者であり、継承者としての役目を担わされている。そのためジェンダー規範は、特に女性の場合道徳的な基準と結びつき、境界線を超えることが困難にされている[5]。そこで文化とジェンダーの構築性とその相互関連を明らかにし、脱構築することによって両者を国民国家の枠付けから解放することが必要である。そうして初めて文化とジェンダー・コンセプトの新しいパラダイムを発見し、展開することが可能になる。

9.11テロ以来ますます影響力を増しているサミュエル・ハンチントン（Samuel Huntington）の、衝突と葛藤に基礎を置き、そこに帰着せざるを得ない文化モデルを否定する新しい文化コンセプトから出発し、さまざまな文化圏について文化とジェンダーのあり方を分析し、脱構築することにこのコースの意味がある。

5－2　インターカルチュラリティと多文化コンセプト

異文化あるいは間文化（インターカルチュラリティ）コンセプトはそれぞれの文化を閉鎖的で自己完結的な領域として想定するもので、そのような文化が平行して存在しているという考え方である。

また多文化コンセプトはさまざまに異なった文化が一つの社会の内部に併存している場合を意味し、単一社会・単一文化という多くの社会でのコンセプトと違って、多様性を認め、それぞれの文化が等価

値を持つものであることを強調する立場である。しかしながらこの場合にもインターカルチュラリティ・コンセプト同様、自文化と他文化という伝統的な対立の構図は崩されないままである。というのも、多文化社会内部のそれぞれの文化はこれまで通り、それぞれ均質で他と区別される自己完結的で閉鎖的なものであると想像されている。そのため文化間の境界を越えるには至らない。ヴェルシュが指摘するように、このコンセプトの場合、却ってこの文化間の境界を基礎として自文化の価値を認めさせることを目的としているとも考えられる。

インターカルチュラリティ・コンセプトはこのような多文化コンセプトに対し、諸文化「間」の問題を扱うため、少なくとも文化間の交流と対話を強調する点では重要な意味を持っているとも言える。

5－3　トランスカルチュラリティとは何か？

これに対しトランスカルチュラリティ・コンセプトは新しい文化解釈を展開する試みであると言える。文化はここでは最初から混交したハイブリッドで透過的なもの、そして混交を許容するものとして理解されている。つまり、この場合には他の文化についてだけでなく自文化も単一、均質などではなく、トランスカルチュラルな特性を持つものであるという視野が開かれる。

5－4　ジェンダーと文化理解

次にジェンダーと文化コンセプトの間にどのような構造的平行関係があるのか、見てみたい。ジェンダーという概念は社会的、文化的に構築されたものであり、それによって差異とアイデンティティが築かれる。これは例えば、ある文化がそれによって規定されたジェンダー関係によって判断されることにも現われている（例えばイスラム文化圏はその女性差別的な構造のため、遅れた反動的な社会としてネガティブに見られ、西欧文化における基本的に平等的な女性の扱いのため、進歩的でリベラルな社会としてポジティブなイメージで見られる）。ジェンダーは文化によって、それぞれ全く違ったふうに定義され、実践されている。そして、それはそれぞれの文化の相対性、つまり、それぞれの文化の変化、変容可能性をも意味している。ジェンダー研究においては、一見自然なものと見える差異もある特定の文化の特定の時期に支配的だった考え方によって作られた構築物である、という事実を認識することが重要な課題とみなされている。そこでジェンダー研究によって、「ある文化に閉じ込められている」状況の克服が可能になる。トランスカルチュラルな関係は特に女性たちにとって、ある特殊な文化によって規定されながら、その文化の決定権からは全く閉め出されているというのが、どういうことなのかを自覚させ、そしてそのような文化の境界線を越える可能性を意味している。

このように文化とジェンダーとは密接に関連しあっている。ジェンダーと文化の認識において、しばしば過った印象が支配している。つまり二元的、二分法的に設定された差異の意識である。男性と女性とはそのような差異として意識され、自文化と他文化との対立において自覚される。両方のケースにおいて、自己の領域から他者を排除するという同じメカニズムが作用している。自己のネガティブに思われる特性は、他者にイメージ投影され、自己（男性）を上位に、他者（女性）を下位に置くという序列づけが働く。

ジェンダー研究においてもトランスカルチュラリティ研究においても、目的とするところはこのような二分法の克服に貢献することである。それによって初めて、ジェンダー・センシビリティと結びついたインターあるいはトランスカルチュラル能力を発達させることができる。それにはさまざまな立場と

の対話を常に重ねていくことが必要である。ネット上の教育は、そのような、差異の問題が自由に扱われる、開かれたコミュニケーションの場として利用することができるかもしれない。

6　文化圏の例

以下にコース「グローバル時代の異文化間コミュニケーションとジェンダー」において、6つの文化圏での文化とジェンダーの問題がどのように扱われたのかを紹介する。

6－1　アラブ文化圏

エドワード・サイード（Edward Said）がその著書『オリエンタリズム』で明らかにしたように、他文化の研究に関わる研究領域はその成立史において、またその認識論的、方法論的基礎において差異のディスコースに自覚的である義務がある。

ヨーロッパ近代の成立期には、自己の社会と文化についての多くの記述が、オリエントを対立物とし、それとの境界線を引くことによって成り立っていることが証明されている。シリア生まれの文学者であり作家のラナ・カバニ（Rana Kabbani）はその著書『東洋という神話（Europe's Myths of Orient)』のなかで、ヨーロッパで作られたエキゾチックなオリエントの例を挙げ、さらにオリエント人のオリエント化とジェンダーの関連をも示している。ヨーロッパ近代の芸術と文学においては、オリエントにおけるジェンダー関係についての幻想が自己の構築にとって中心的な役割を占めている。アラブ世界におけるジェンダー不平等についてのテーゼの信ぴょう性はともかく、不平等なジェンダー関係が現在、文化的差異を構築するための政治的手段として使われていることは明らかであり、このコースではその関連を分析している。

現在、グローバル化は冷戦後の新しい権力構造において、オリエンタリズムの新しい最盛期を意味しているかに見える。女性学とジェンダー研究は政治手段化されたアラブ・イスラム圏における文化とジェンダーをめぐるディスコースの脱構築への可能性を持つものとして、特別な役割を果たすことができる。それはオリエント人のオリエント化の議論において過去においても決定的な批判と自己批判、また理論的究明を行ってきた。このコースではそれを紹介し分析する。

6－2　USA：USA における Gender―Race―Culture：境界とネットワーキング

アメリカの場合、gender、race、culture の問題が扱われた。ジェンダーは常に race という概念を通して理解されることから、このコースではまず1週間目に19世紀の gender と race の構築の例を分析することから始めている。歴史的に作られたアフロ・アメリカ人女性を貶めるイメージとこれと対照的な白人中流・上流階級の「真の女性性」崇拝の関係と、そのような gender と race に規定されたイメージがグローバル化過程のなかでさらに機能化され利用されていることを、ベネトンの宣伝広告などの表象分析によって明らかにする。2週間目には文化と国家の境界づけと境界線の克服の過程を扱う。gender と race による規定とよく似た位置づけが文化と国家に関する境界づけにも見られ、文化と国家の境界は絶対的なものであることが強調され、文化的・国家的空間は単一、閉鎖的なものとされる。しかしながら文化はさまざまな接触、交流あるいは対立を通して定義されるものであり、統一的な全体として考えることはできない。また境界線は閉鎖的なものではあり得ないことを分析した後、閉鎖的な文化空間

から出発し、それを政治空間と結びつける文化概念の問題性が明らかにされる。

つまりこのコースではgender、race、cultureの持つ政治的起爆力を明らかにするとともに、その基盤にある自己と他者という区別と位置づけを問題視する。それによって対話能力を促進するとともに、他の文化を想像するとき、そこに常に自己の投影が伴っていることと、自己が常に他者によっても規定されているのだという意識を養うことを意図している。

6－3　ラテンアメリカ（メキシコ）：トランスカルチュラルなモデルとしてのラテンアメリカ

今日ラテンアメリカ文化と呼ばれるものは、文化接触と移動の結果成立したものである。コロンブスによる新世界のいわゆる「発見」は、グローバル化時代の始まりでもある。それがアメリカ原住民の支配によって起こったにしても、それはインディアン文化とスペイン文化の遭遇であり折衝であった。つまり、トランスカルチュラルな過程は、ラテンアメリカをその始まりから特徴づけるものであった。

支配関係と創造的なトランスカルチュラルの形態は両方とも文化関係だけでなく、ジェンダーの差異を特徴づけるものでもある。このコースでは、この両面価値的な文化過程とジェンダー関係の問題性を、メキシコを象徴する二人の女性――すなわち征服者エルナン・コルテスへの貢ぎ物として贈られたアステカの王女マリンチェと、さまざまな相反する要素を一身に集中し、ジェンダー問題を自己の芸術のテーマにしたフリーダ・カーロ――を扱うことによって明らかにしている。

6－4　東欧（ロシア）：ロシア連邦におけるジェンダー関係と変容

このコースでは2つの目標があげられている。一つにはロシア連邦におけるジェンダー関係への洞察が得られることと、もう一つにはジェンダー構築がどのように社会の構造とある社会の「解釈地平」(Deutungshorizont)を反映しているかを示すことである。ジェンダー構築はそれが作られる社会に依存し、またその社会に大きな作用を及ぼす。ここでは女性と男性がロシアの社会において、自己像との関係のなかでどのような女性性と男性性を創造しているのか、そしてそれがまたロシア社会の文化的解釈の地平に規定されていることを見る。

すべての象徴の構築はその社会の文化的解釈の地平の一部をなしている。そこで、ここで扱われるテキストを通して3つのレベルが明らかになる。つまり、ソビエトとロシア社会の構造、ソビエトとロシア社会の解釈地平、そしてその社会で生活する人々の自己解釈のレベルである。ここではそれを2つの時間軸、つまり70年間存続したソ連時代と12年来続いているポスト・ソ連の、変容しつつある現在のロシア社会を考慮しながら分析する。

6－5　アジア：文化的差異との協議：アジア的パースペクティブ

アジアに存在する、とてつもなく大きい文化的多様性のなかに共通点を探すとすれば、文化的遭遇と、その際成立する世界中の人間との交流過程における位置づけの形式に見出される。その位置づけが外からの役割規定や、表象や投影に対抗して起こる反応として成立するとき、その共通点はもっともはっきりする。そのような自己の位置づけは、ジェンダー関係との関連において特にはっきり現れる。

またそれは女性の権利に関する領域においても現れる。女性運動家やアジア市民社会の活動家たちは何十年にもわたって、西洋的なコンセプトとして理解されている「人権」がアジアのコンテキストのなかで、どのようにして実現できるのかという問題ととりくんでいる。女性の権利をめぐるアジアでの議

論を考える時にはまた、アジアにおける市民社会の多様な位置づけも明らかになる。人権問題においては、アジア的位置づけがあるわけではなく、むしろ多くの多面的な意見や行動上の策戦の違いがあるだけである。スリランカの社会人類学者ダリニ・ラジャシンガム-セネナヤケ（Darini Rajasingham -Senanayake）は、「アジア文化」などという概念に還元することのできないアジアの文化的多様性を表現するために、「アジアは存在しない」と言っている。

このコースでは外部と内部への位置づけの問題を二段階にわけて扱う。第一段階では、ミルセア・エリアーデ（Mircea Eliade）とメトレイ・デヴィ（Maitreyi Devi）の文学的対立を例に、ジェンダー構築において西洋と東洋における他者像と相互の役割振り当てがどのように行われるかを分析する。第二段階では人権、特に女性の権利の問題が扱われる。アジアでの著名な男性と女性の人権擁護者たちのテキストをもとに、現在アジアの女性ネットワークにおいて問題になっているジレンマを分析する。

6－7　日本：越境とトランスカルチュラリティ：日本の近代化における国民国家・文化・ジェンダー連関の克服

このコースは、トランスカルチュラリティとジェンダー研究を結びつけることによって比較文化研究に新しい方法が生み出せるのではないかという試みでもある。

19世紀半ばから始まった日本の近代化は、西洋との葛藤によって始まり、これに対抗するための国民国家建設という形をとった。それは西洋とアジアの間で、まず西洋に対して東洋を確立させ、東洋の中で覇権を握るという二重のアイデンティティ確立の過程として実現された。そのなかで西洋と日本の伝統から新しいジェンダー秩序が生み出され、それは象徴的な意味でも現実においても、新しい国家と国家に規定された国民文化において中心的な意味をもって利用された。このコースではそのような国民国家・文化とジェンダーの構築性を明らかにし、またその密接な連関を解明することによって、脱構築することを目的とする。また、国民国家を越え、国民文化に規定されたジェンダーを脱構築する実践として、慰安婦問題に関して民衆法廷である「女性国際戦犯法廷」を実現したVAWW-NETジャパン（Violence Against Women in War Network Japan）の運動などを、トランスカルチュラルな意識と新しいジェンダーのあり方を探る例として分析する。

7　総　　括

7－1　コース全体についての自己評価

●ネット上の授業の長所と短所

ネット上の授業については、長所と短所が同一の事実の両面であることが多いので、その長所をうまく使って、短所を補い利用する必要がある。ここではまず一般的によく知られたネット上の授業の長所と短所を簡単にまとめたあと、実際の授業体験をとおして得られたあまり知られていない利点と問題点を指摘し、そこからネット上の授業の新しい利用可能性を探ってみたい。

●長所

○時間と空間の制限を受けずに、学習の時と場所を選ぶことができる。

○学習の方法を自分にあった速度や時間配分など個性的に選択できる。

○ビデオフィルムや映像など視覚化によって複雑な内容を具体化し、理解しやすくできる。

○自立した学習が可能である。
○時間をかけて自省的なやり方で学習することができる。
○距離的に離れた受講生どうし、あるいは専門家とのコミュニケーションが可能である。
○学習内容を学ぶだけでなく、メディア利用能力を高めることができる。

●短所
○アクセスが保証されていなければならない。
○教師によるコントロールの可能性が制限される。
○自己学習能力のない受講生にとって困難が大きい。
○ほとんどすべてのコミュニケーションが文字言語によるため時間的負担が大きい。
○技術的、内容的問題解決に時間がかかる
○チャットや電子メールによるコミュニケーションが容易であることから、内容が浅薄になりやすい。

●表現・コミュニケーション能力の促進
　インターネット上の教育は、文字による絶えまないコミュニケーションであるため、相手を理解し、自分も他人に理解されるような形で表現するという能力が養われる。

●相互作用
　インターネット上の教育はコミュニケーションによるため、教える側も教えられる側も相手の意見によって、学ぶ点や影響される点が多い。言語によるよりも相互作用の度合いが高い。

●個性の発達と熟考の可能性
　授業を通して気づくことは参加者の答え方が普通の授業におけるよりもずっと多様だということである。それは、授業ではすぐ数人の活発な参加者によって議論の方向が決められてしまうことや、また授業を担当する教官や講師等の意見や考え方によっても方向が作用されやすく、多様性が失われてしまうことによるためと思われる。それに対し、ネット上の授業では参加者が個性的に時間をかけて自分の考えを自由に発展させ、まとめあげることができる。コースディザインや、質問設定は講師によるものでも、参加者がコースの形成に参与し、影響を及ぼしやすい。講師による性急な介入の可能性が制限される。

●対面授業では無視できない視覚的な差異が無化されることによって、ネット上の授業は比較的自由なコミュニケーション・フォーラムとして利用することができる。

●性差別と外国人差別の問題の平行性
　ネット上の授業では個性を生かした参加が可能であり、対面授業で生まれやすい差異化やハンディキャップが差し引かれ均衡が生み出されやすい。例えば二重の差別を受けやすい移民の女性の参加者というような場合、言葉のハンディ、あるいは女性であることから、消極的と見られたり、消極性が求められていたりする場合、ネット上の授業ではこのような差異が無化され、問題にならなくなるため自由に参加しやすい。

●トランスカルチュラリティとジェンダー研究の目的
　ジェンダー研究においてもトランスカルチュラリティ研究においても、目的とするところは自己と他者、男性と女性といった差別をもった二分法の克服に貢献することである。それによって初めて、ジェンダー・センシビリティとそれと結びついたインターあるいはトランスカルチュラル能力

を発達させることができる。そのためにはさまざまな立場の人間との対話を常に重ねていくことが必要である。ネット上の教育は、そのような、差異の問題が自由に扱われる開かれたコミュニケーションの場として役に立つかもしれない。

●境界を越えるコミュニケーション

インターネットを使っての教育は空間的にかけ離れ、文化的に全く違う背景を持ち、年令も人生経験も全く異なる人々を結びつける大きな可能性を持っている。そうしてトランスカルチュラルな対話が支障なく行われる可能性が開かれる。

●アクセスの問題

これは一般的によく知られた問題であるが、これまで述べたさまざまな利点に対し、まず誰がインターネットを使えるのかという疑問を忘れてはならない。誰にでもアクセス可能なコミュニケーション空間をどうやって作りだすことができるのかは、インターネット教育のこれからの課題であると言えよう。

7－2　学生のコースについての意見と評価

このコースには25人のさまざまな大学からの受講者があり（１人は社会人；学生のうち３人は男子学生；そのうち２人は最後まで残った)、コースの途中でもチャットや電子メールなどを通してコースについての感想を聞く機会はあったが、終わりに近い時期にこのコースについて学生評価の意味でアンケートによる意見調査が行われた。このアンケートは非常に詳しく尋ねるもので量も多かったが、参加した８人のうち７人が詳しい回答を出した。以下にその結果をまとめた。

●授業に参加した動機

たいていの参加者はそれ以前にネット上のコースを受けた経験はなかった。コースに参加した動機は、テーマが面白そうであり、内容的にさまざまな文化圏についての知識が得られること、ジェンダー研究についての関心が満たされ、文化概念の批判的考察ができる、またジェンダー研究とオンライン授業の組み合わせに関心を持ったものなどがあった。特殊なケースとしては福岡でドイツ語を教えているドイツ人女性の場合で、自分のドイツ語のコースに取り入れたいテーマとして参加したというものであった。さらにオンライン授業への関心や、自由な時間配分などの参加理由も挙げられた。

●技術上の可能性の長所と短所

いろいろな技術上の可能性の長所と短所については、次のような意見が聞かれた。チャットは賛否両論で、肯定的なものは議論がいきいきしており、直接的な授業内容などについての個人的意見交換ができ、また他の参加者の意見からも学ぶことができることなどがあげられた。その一方、多人数でのチャットは非常に早く進行し、ゆっくり考える暇がないことや、意見と答えが交差して混乱するなどの短所をあげるものが多かった。フォーラムはゆっくり考えて書くことができるので、意見交換にはもっとも適しており、BSCW―サーバーはいろいろな資料が使えて便利であり、もっといろいろな形で利用すべきだったとの意見があった。またグループ作業をする課題があったが、多人数での時間の調整と電子メールなどでのやりとりに時間がかかることから、難しいという意見が多く、せいぜい２～３人のグループが理想的であり、グループ作業にもっと時間の余裕があった方がいいとされた。

●この授業がインターネット上のコースとして行われたことについて

この授業がネット上で行われたことについては、10人ものさまざまな大学の様々な専門領域の研究者の授業と指導を受けることはこのような形でのみ可能であったというものや、世界中の人間と交流できることの利点、時間と場所に関係なく、自分にあった形で作業ができたことの利点や、すべてのデータがあとで読めることなどがあげられた。が、その反面、すべてが文字化されることから、書かれたテキストが完全なものに見えることへの懸念も指摘された。また内容的に非常に密度の高い授業で、議論が尽きないため、もっと対面授業で議論したかったという希望も述べられた。またネット上のコミュニケーションで相手が見えないため、偏見がもたれにくいという意見もあったが、またその反面書式でのコミュニケーションで自発性が失われる点も指摘された。

●異文化間コミュニケーションについて

異文化間コミュニケーションについて何を新たに学ぶことができたかについては、文化概念がそれぞれ手段化されていることへの意識が高まったこと、自分の属する社会内部へのトランスカルチュラルな視点が生まれたこと、またさまざまな文化の構築性を自省的・批判的に見、考えられるようになったこと、そしてそれによって、文化間の境界づけによるのでなく、差異を承認することのできる新しい巡り逢いの空間が成立することへの観測が指摘された。

●インターカルチュラリティとジェンダーの関連について

インターカルチュラリティとジェンダーの関連については女性差別が自国の文化伝統によって説明され、根拠づけられることから、文化規範によるジェンダー・コンセプトを批判的に見るためにインターカルチュラリティ能力が必要であること、ジェンダー規範や役割は文化によって規定されるが、文化形態もそのジェンダー関係によって形作られることから相互関連が指摘された。

●インターカルチュラリティとトランスカルチュラリティの違いについて、またトランスカルチュラリティ・コンセプトの限界について

インターカルチュラリティとトランスカルチュラリティの違いについて、またトランスカルチュラリティの限界についての質問では、次第に明らかになる文化のトランスカルチュラルな性格を指摘することは重要であり、純粋な文化など存在せず、接触、交流と相互影響がそれぞれの文化を規定していることが指摘された。またトランスカルチュラリティがより現実の状況に近いものであり、規範的というよりは記述的なものであるので、「コンセプト」よりは、説明的な「パラダイム」という概念を使った方がよいという指摘もあった。トランスカルチュラリティは文化の解放性や、ダイナミズムを表現し、文化間の境界づけを克服する可能性を開くものであり、その限界もこの点の裏面に指摘された。つまり、文化間の差異や境界があいまいになり、文化間の共通性にも関わらず存在する葛藤や争いに対処するには、さまざまな文化間の相互関係や対話を強調し重視するインターカルチュラリティのコンセプトが必要であることが指摘された。

●国際的なジェンダー研究における異文化間コミュニケーション能力の意味

国際的なジェンダー研究において異文化間コミュニケーション能力がどんな意味を持つかについては、ジェンダー研究を国際的なレベルで行う際、異文化間コミュニケーション能力が必ず必要であること、ジェンダー規範は近代社会においては文化によって根拠づけられ、手段化されているため、それぞれの文化を代表する人間は、もっとも葛藤のあるジェンダー関係について自己批判的、オープンに対話する必要があることなどが指摘された。学術研究一般についても異文化間コミュニ

ケーション能力が必要であることが次の点で確認された。自分の偏見を克服し、他人の意見をオープンに受け入れること、他人の考え方や方法をまず認め、それをさらに発展させる方向で考えること、他の考え方を尊敬するだけでなく、お互いにともに批判的に討議しあうことなどである。またこのコースのやり方として、異文化間コミュニケーション能力とジェンダー研究を組み合わせたことでジェンダー研究に対する関心が高まったことや、普段意識せずにいる自分自身の考え方を概念定義などで分析することによって、意識化させることもでき、またさまざまな学問領域にもそれぞれ独自の文化があり、それも異文化間コミュニケーション能力によって克服できる見込みが生まれたなどの指摘があった。

●コース全体についてポジティブな点とネガティブな点についての感想

コース全体についてポジティブな点とネガティブな点についての感想は、まず技術的な面では非常に時間のかかる作業であること、すべてが文字化されなければならないためよけい時間がかかるが、その反面、自分の考えをまとめるために非常にいい練習になったこと、また普通の授業よりずっと多くのことが記憶に残ったことなどが指摘された。また時間を自由に使うことができるため、それぞれのテーマにゆっくり時間をかけ集中することができた点も挙げられた。内容の面では、テーマは非常に面白かったが、読まなければならないテキストの量が多く、特にはじめの理論の部分が難しかったことが指摘されたが、ほとんどは、テーマの多様性や、それぞれのテーマの専門性にもかかわらず多角的であること、またさまざまな研究領域からの多大な情報が得られ、大きな刺激があったことを指摘していた。

●自分の将来や将来の仕事にとってどのような意味があると思うか

このコースが自分の将来や将来の仕事にとってどのような意味があると思うかについては、自分の仕事の方法に役に立ったというもの、修士論文のテーマを見つけることができたというものや、多くの刺激を受け、自分の仕事に結びつける可能性が見えてきたというものや、文化概念について細かい理解が得られ、普通には得ることができなかったような、さまざまな文化圏についての知識が得られたことが挙げられた。また文化を自省的に扱うことによって、他のことについても応用できる能力が開発できたことが指摘された。このコースの授業は回を重ねる度に面白くなったことや、他の人の意見を注意深く聞き(読み)、限界を越えてコミュニケーションが行われたことは、大きな印象を与え、このような授業のありかたが多大な可能性を持つものであることがわかったなど、最後まで粘り続けた参加者にとっての実りは大きかったことを物語っていた。

●改善のためのヒント

最後にこのコースを改善するためのヒントについては、コースのコンセプトが非常に高く評価された反面、時間割りが密で、多くの内容を盛り込んだために時間の余裕がほとんどなく、もう少しゆとりが欲しかったことが挙げられた。また少なくとも最後の授業を対面授業にして、全体についてもっと議論したかったことなどが指摘された。またさまざまな文化圏についての授業をそれぞれの文化圏の代表者に受け持ってもらうこともできるのではないか、という指摘もあったが、これはこれからこのようなコースを国際的に行う時のためのヒントとしてうけとめることができる。

7－3　終わりに

初めての実験で学生だけでなく、教師の側も新しく学ぶことが多くその意味でも非常に刺激的な実験

であったが、苦労も多いだけに実りも大きい試みであった。また授業を英語で行うなどして日本の大学や研究者をはじめ、国際的な共同プロジェクトとして、今後これをさらに発展させることを考えていきたい。

注

1　ボロニア協定とは1999年に欧州連合加盟国によって批准されたヨーロッパ圏の大学制度を統一するための協定で、2010年を目処に国際的に承認された学位制度と3段階の Bachelor、Master、Doctor（学士、修士、博士）過程の導入、授業の単位認定のための国際的に比較可能な credit point という点数制度の導入、全ヨーロッパで有効な教育の質についての基準設定とその評価方法の開発などの実現が目標とされている。

2　ジェンダー・メインストリーミングは女性問題を特殊な、女性にだけ関わるものとして扱ってきた女性政策と違い、ジェンダーに関する問題をあらゆる政策、行政分野において常に主流として扱うことを意味し、ジェンダー観点を政治行動・決定の基準とする立場を意味する。

3　医学など特定の学科については Numerus clausus と呼ばれる制度によって入学学生数の制限が定められている。

4　ドイツでは大学入学資格を得るための最終学校であるギムナジウムまでの教育期間が13年間であるため、日本の学士制度にあたる Bachelor は3年間となっている。

5　そのようなある文化圏の守るべき核としての女性たちの役割から、戦争の際に敵国女性を集団暴行することが特別な効果を持つことになる。

参考文献

Angerer, Marie Luise; Dorer, Johanna (Hg.) (1994): *Gender und Medien, Theoretische Ansätze, Empirische Befunde und Praxis der Massenkommunikation: Ein Textbuch zur Einführung*. Wien.

Appelt, Erna (1999): *Geschlecht - Staatsbürgerschaft - Nation: Politische Konstruktionen des Geschlechterverhältnisses in Europa*. Frankfurt a.M.; New York.

Arnold, Patricia; Gerhard Zimmer (Hg.) (2004): *E-Learning. Handbuch für Hochschulen und Bildungszentren; Didaktik, Organisation, Qualität*. Nürnberg.

Baacke, Dieter et al. (Hg.) (1999): *Handbuch Medien: Medienkompetenz - Modelle und Projekte*. Bundeszentrale für politische Bildung, Bonn.

Baacke, Dieter (2001): *"Was ist Medienkompetenz?"; Medienkompetenz in Theorie und Praxis,* hrsg. von der Gesellschaft für Medienpädagogik und Kommunikationskultur. Bielefeld.

Bahktin, M. M. (1986): *Speech Genres & Other Late Essays*. Austin.

Beinzger, Dagmar et al. (Hg.) (1998): *Im Wyberspace - Frauen und Mädchen in der Medienlandschaft*. Bielefeld.

Benhabib, Seyla (2002): *The Claims of Culture. Equality and Diversity in the Global Era*. Princeton.

Bronfen, Elisabeth; Benjamin Marius, Therese Steffen (Hg.) (1997): *Hybride Kulturen. Beiträge zur anglo-amerikanischen Multikulturalitätsdebatte*. Tübingen.

Castells, Manuel (2002): *Das Informationszeitalter Teil 1, Der Aufstieg der Netzwerkgesellschaft*. Opladen.

Castells, Manuel (2002): *Das Informationszeitalter Teil 2, Die Macht der Identität*. Opladen.

Castells, Manuel (2002): *Das Informationszeitalter Teil 3, Jahrtausendwende*. Opladen.

Cummins, Jim und Dennis Sayers (1995): *Brave New Schools: Challenging Cultural Illiteracy Through Global Learning Networks*. New York.

Devi, Maitreyi (1994): *It Does Not Die: A Romance*. University of Chicago. Chicago.

Drechsel Paul; Bettina Schmidt; Bernhard Gölz (Hg.) (2000): *Kultur im Zeitalter der Globalisierung. Von Identität*

zu Differenzen. Frankfurt am Main.

Eagleton, Terry (2000): *The Idea of Culture*. Oxford.

Eliade, Mircea (1998): *Das Mädchen Maitreyi*. Frankfurt a.M.

Faßler, Manfred (1997): *Was ist Kommunikation?* München.

Giesen, Bernhard (Hg.) (1991): *Nationale und kulturelle Identität: Studien zur Entwicklung des kollektiven Bewußtseins in der Neuzeit*. Frankfurt a.M.

Harcourt, Wendy (Hg.) (1999): *women@internet - creating new cultures in cyberspace*. London/New York.

Huntington, Samuel P. (1996): *The clash of civilizations and the remaking of world order*. London.

Kerres, Michael (2001): *Multimediale und telemediale Lernumgebungen. Konzeption und Entwicklung*. München.

Kirkup, Gill; Prümmer, Christine von (Hg.) (1997): Distance Education for European Women. The Threats and Opportunities of New Educational Forms and Media. In: *The European Journal of Women's Studies*, 1997, Vol. 4, Issue1, Feb, S. 39-62.

Kleimann, Bernd; Klaus Wannemacher (2004): *E-Learning an deutschen Hochschulen. Von der Projektentwicklung zur nachhaltigen Implementierung*. Hannover.

Kreutzner, Gabriele; Schelhowe, Heidi; Schelkle, Barbara (2001): Globales Lernen und Interaktion: Die virtuelle Internationale Frauenuniversität (vifu) In: *EB-Forum Beiträge und Berichte aus der evangelischen Erwachsenenbildung*. Nr. 1.

Löhrmann, Iris (Hg.) (2004): *Alice im www.underland. E-Learning an deutschen Universitäten*. Bielefeld.

Mae, Michiko (2002): Transkulturalität und Genderforschung. In: *Zeitschrift für Germanistik Bd*. 3, S. 482-487.

Metz-Göckel, Sigrid, Schmalzhaf-Larsen, Christa und Belinszki, Eszter (Hg.) (2000): *Hochschulreform und Geschlecht-Neue Bündnisse und Dialoge*. Opladen.

Moser, Heinz (2000): *Einführung in die Medienpädagogik. Aufwachsen im Medienzeitalter*. Opladen.

Pasero, Ursula; Landschulze, Maren (2001) *Gender und Informationstechnologien im Kontext der virtuellen ifu*. Universität Kiel: Zentrum für Interdisziplinäre Frauenforschung.

Planert, Ute (Hg.) (2000): *Nation, Politik und Geschlecht. Frauenbewegungen und Nationalismus in der Moderne*. Frankfurt a.M.; New York.

Said, Edward W. (1978): *Orientalism*. Penguin Books. New York.

Schlehe, Judith (Hg.) (2001): *Interkulturelle Geschlechterforschung. Identitäten - Imaginationen - Repräsentationen*. Frankfurt a.M.; New York.

Schorb, Bernd (1995): *Medienalltag und Handeln - Medienpädagogik in Geschichte, Forschung und Praxis*. Opladen.

Schulmeister, Rolf (1997): *Grundlagen hypermedialer Lernsysteme. Theorie - Didaktik - Design*. Oldenbourg etc.

Shimada Shingo (1994): *Grenzgänge - Fremdgänge. Japan und Europa im Kulturvergleich*. Frankfurt a.M.; New York.

Thimm, Caja (2000): *Soziales im Netz: Sprache, Beziehungen und Kommunikationskulturen im Internet*. Opladen.

Thomas, Alexander (2003): Interkulturelle Kompetenz - Grundlagen, Probleme und Konzepte. In: *Erwägen, Wissen, Ethik* (*EWE*), Jg. 14, Hft. 1, S. 137-150 und S. 221-228.

Warschauer, Mark (1997): *Computer-Mediated Collaborative Learning: Theory and Practice*. Modern Language Journal 81(3), p. 470-481.

Welsch, Wolfgang (1997): Transkulturalität. Zur veränderten Verfassung heutiger Kulturen. In: I. Schneider, Ch. W. Thomsen (Hg.): *Hybridkultur. Medien, Netze, Künste*. Köln.

Welz, Frank (1999): Geist oder Bit? Neue Medien in der sozial- und kulturwissenschaftlichen Lehre. http://www.zmk.uni-freiburg.de/Online_Texts/Welz_Geist_oder_Bit.pdf

Wieman, Anneke (2001): Organising Virtual Conferences. Lessons and Guidelines. http://www.ftpiicd.org/files/research/reports/report2.doc